

子どもゆめ基金20周年記念事業「社会の要請に応える体験活動等事業」

サバイバルキャンプ ～無人島で72時間を生き抜く～

令和3年12月3日（金）～5日（日）

【担当：園部 翔】



1. 事業の背景

独立行政法人国立青少年教育振興機構では、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により自然体験や体験活動等の機会が減少していることを踏まえ、必要な感染防止対策を行いながら安全安心な体験活動等の重要性を広く普及・啓発することが求められています。

また、国土強靱化計画における広域防災保管拠点としての役割を踏まえて施設内外で防災・減災教育の推進を図っています。

全国の防災力に関する調査結果（日本気象株式会社調査2014年）によると長崎県は46位であることが分かりました。また、近年の長崎県では、線状降水帯による大雨や台風、地震など災害を身近に感じるが増えていると感じます。

そこで、過酷な生活環境を通して、自己成長や自己実現等を図ることを目的に、無人島で周囲の人と協働して生き抜くための必要な知識やスキルを考える事業として企画しました。

企画・運営には、本所で活動を続けている法人ボランティアが、株式会社大村湾リゾートで勤めており、連携することで、無人島という環境の提供が可能となりました。

2. 事業の趣旨

電気・ガス・水道のない過酷な生活環境での無人島キャンプを通して、自らを律し自ら動く忍耐力と行動力、ライフラインに頼らない生活力を身に付け、自己成長を図る。また、周りの人々と力を合わせて生き抜く中で、集団を導くリーダーシップを育む。

3. 事業の目標

参加者が「楽しかった」だけでなく、「ためになった」と感じてもらえるようにする。

4. 共 催 株式会社大村湾リゾート（以下、大村湾リゾートという）

5. 対 象 高校生以上の学生 30名

6. 事業の実施

(1) 期 日 令和3年12月3日（金）～12月5日（日） 2泊3日

(2) 参加者数 16名

所属	男性	女性	計
大学生	9	5	14
高校生	0	2	2
合計	9	7	16

(3) プログラム

12月3日(金)	12月4日(土)	12月5日(日)
【災害について知る日】 @国立諫早青少年自然の家 20:15 受付 20:30 結団式 21:00 事前演習 入浴、就寝	【個人のスキルを高め、生き抜く日】 @無人島「田島」 7:00 朝食・宿泊場所片付け 9:00 事前演習 11:00 昼食、バス・フェリー移動 フィールドワーク 水、食、火、寝床確保 夕食、入浴、就寝	【日常に感謝する日】 @無人島「田島」 朝食、片づけ 10:00 ふりかえり 11:30 フェリー移動 12:30 昼食、解散式 13:30 バス移動 15:30 解散

(4) 活動の様子



【結団式】

結団式の始まりは緊張感が漂っていました。まず、なぜ無人島を会場にしたのかなど事業趣旨の説明を行いました。その後、緊張感をほぐすために、ともに活動するメンバーをお互いに知り合えるよう、自己紹介を中心とした活動を行いました。

参加者は活動を通して徐々に表情が和らいでいきました。



【事前演習】

無人島での活動時には、スタッフは安全指導のみを行うことを伝え、自分たちで活動ができるよう、無人島で必要なロープワークやバックパックについての事前演習を行いました。

参加者は、楽しみながらも真剣なまなざしで活動に取り組んでいました。



【フィールドワーク(全体)】

無人島に到着後、必要な安全指導を行いました。また、島内に「掲示板」を設置し、参加者はそこから活動中等の必要な情報を入手する方式を採用しました。

当日は、強風に見舞われましたが、参加者は全員が1日を安全に過ごせるよう、事前演習で学んだことを生かして生活していました。お互いに意見を出し合っ「水・食材の配分」「火起こし」「寝床づくり」を行っていました。





【フィールドワーク（水・食材）】

無人島には飲用に適した水や食材を確保できないため、参加者は事前に当所で給水した 50 のポリ容器と配給された 3 日分の食材を持って入島しました。

参加者は、自分たちでそれぞれの配分を考えて過ごしていました。



【フィールドワーク（火）】

薪やマッチ、ライター等は支給せず、参加者にはファイヤースタータを配布し、事前演習で使用方法のみを伝えました。

参加者は、薪の代わりに流木や落ち葉を集めていました。最初はなかなか火が付かず、苦戦していましたが、意見を出し合いながら、最後は全部の班が火をつけることができました。



【フィールドワーク（寝床）】

参加者には、シェルター、銀マット、寝袋を事前に配布しました。

コロナ感染症対策と独りで一晩を過ごすことで、自己について振り返る機会にすることをねらいとして、一人一つの寝床をつくって過ごしました。

事前演習で学んだロープワークを生かして、きれいに寝床を作っていましたが、孤独や寒さにより、熟睡できない参加者もいました。



【ふりかえり】

3 日間での体験を通して気づいたことを共有・整理し、「日常化」につなげられるようふりかえりを行いました。

参加者は、同じ活動でも気づきが違うことに驚いたり、同じ気づきに共感したりする姿が見られました。

7. 評価

(1) アンケート結果

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

(2) 参加者の声

- ・一人でできることは少ないと感じました。誰かが動けば助かることがあるので、その時に動ける人でいたいです。
- ・周囲の人と声を掛け合うことで、不安が軽減されるし、多くのことができるようになるので、実際の現場では、まずは声を掛け合うようにしたいです。
- ・体験を通して人を助けるための自分のレベルを把握することができたので、知識を高めていきたいです。
- ・食材や水を計画的に摂取する経験がなかったので、食材や水の貴重さを感じる機会になりました。

8. 成果と課題

(1) 成果

実際に電気・ガス・水道のない過酷な無人島を会場にできたことで、参加者が真剣に活動することができました。その結果、体験を通じた具体的な気付きにつながりました。

本事業の企画・運営は、当所所属の大学生ボランティア2名と、共催団体の大村湾リゾート職員1名と行いました。大村湾リゾートの職員も当所所属のボランティアとして活動をしているため、3名は互いの経験値や特長を理解しあえており、スムーズに企画・運営をすることができました。また、週に1回のオンラインミーティングや月に1回の実地踏査を通して、企画の立て方や、スケジュール感覚を共有しながら企画を進めていくことの重要性に気付くなど、ボランティアにとって多様な学びの機会とすることができました。

本事業の取組にメディアから高い関心が寄せられました。長崎新聞社の取材により記事の掲載、株式会社長崎国際テレビによる企画時から事業実施期間の密着取材により報道番組で10分間の特集が放映されました。NBC長崎放送のラジオ番組にボランティア2名の10分間のインタビューが放送されました。当所の大学生ボランティアの活躍を広く知ってもらう機会となりました。

(2) 課題

会場を無人島で実施する際には、あらゆる状況下で参加者の学びを担保ができる事業の企画が重要です。事業当日は晴天でしたが、風が強く、無人島を運営する大村湾リゾートが定める渡航判断基準と照らし合わせて、当所を出発する直前まで渡航の判断をしかねる天候でした。そのため、現地に渡航できない際にプログラムを実施できる会場等の代案も重要と考えます。

(3) 今後の展望

今回、高校生以上を対象に、防災に関する活動プログラムを実施しました。当所では、次年度以降も小学生を対象に防災・減災事業を実施する予定です。今回実施した事業の成果を生かして、今後も青少年が主体的に防災意識を高め、リーダーシップが育成される機会の充実を図りたいです。